



写真：詫間キャンパス写真部門【最優秀】電子システム工学科3年 横内 裕紀「カルストの日の出」



1. 図書館追想
2. 読書感想文等入賞結果発表
3. 講評（高松・詫間）
4. 入賞作品紹介

詫間キャンパス図書館長 富士原 伸弘

《高松》読書感想文	【優 秀 賞】	1年4組 松本 愛花
	【優 秀 賞】	電気情報工学科3年 浅川 万知
千頁読破記	【優 秀 賞】	電気情報工学科2年 藤居 虹帆
夏休み体験文	【優 秀 賞】	機械電子工学科2年 丸尾 美月
《詫間》書評	【優 秀】	情報工学科3年 山下 真輝他
エッセイ	【最 優 秀】	情報工学科3年 真鍋悠一郎
小説	【最 優 秀】	情報工学科2年 曾根 大靖
短歌	【グランプリ】	電子システム工学科5年 島崎 祐輔他
俳句	【最 優 秀】	1年3組 田上 諒太他

5. 教員・学生による推薦図書 全19篇（教員9篇、学生10篇）

高松キャンパス 機械工学科 徳田 太郎

6. 教員によるエッセイ
7. 図書委員長より
8. 専攻科生より
9. ブックハンティング紹介
10. 図書館からのお知らせ

# 図書館追想

詫間キャンパス

図書館長 富士原 伸弘



4月から詫間キャンパスの図書館長となりました、一般教育科（国語）の富士原です。図書館長交代のご報告に併せて、自己紹介がてら、私自身の図書館にまつわる思い出を少々書かせていただこうと思います。ちなみに上の写真はだいたい20年ほど前の写真が使われているはずですが、生来面倒くさがり屋なので、いちいち撮り直していません。人に歴史有り。今とはかなり雰囲気は違いますが、ご容赦ください。

現代のようにインターネットのデータベースなどが存在していなかった、昭和40～50年代。本などの文字情報に触れることができたのは、本屋が図書館でした。16歳の頃には、当時デビューしたばかりの菊地秀行『魔界都市（新宿）』や夢枕獏『幻獣少年キマイラ』などの文庫本が本屋の棚に並びました。それらを見ながら、随分と胸をときめかせたものです。とはいえ、本屋で「じっくり」本を「立ち読みする」のは誉められたものではありませんので、やはり、きちんと本を読むのは図書館が本命でした。

小学校の頃は図書館の思い出はそれほど多くありません。教室に設置されていた学級文庫をよく読んでいたような気がします。当時大人気だった、プロ野球読売巨人軍の王・長嶋選手のみみつが書かれた単行本を読んだことが、なぜだか記憶に残っています。図書館ではポプラ社の「少年探偵団シリーズ」（江戸川乱歩）をよく借りていたと思います。少し前に、文庫本で復刻されたりしているので、あの独特の劇画タッチの表紙の本を本屋さんで見たことのある人もいないのでしょうか。名探偵明智小五郎と助手の小林少年が二十面相などの怪人達と対決する物語をわくわくしながら読んでいました。

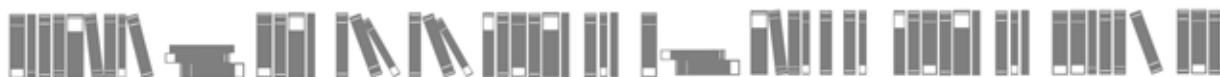
中学生になると、バレーボールのクラブ活動と自宅での高校受験勉強（3年次）のため、図書館に行く機会はかなり減っていたと思います。とはいえ、小学校高学年ぐらいの時に、「ねらわれた学園」や「なぞの転校生」で有名な眉村卓を秋元文庫SFシリーズで知ってからSFに

はまり、星新一、筒井康隆を借りて読んだりはしていました。また、テレビドラマ「宇宙大作戦」（現在のスタートレック）に心酔していたためスペースオペラに夢中で、エドモンド・ハミルトンの「キャプテン・フューチャー」シリーズや高千穂遙の「クラッシャー・ジョウ」シリーズを（自分で買って）読み漁ったのもこの頃でした。

高校生の頃は頻りに学校の図書館を利用していたと思います。もっとも、本を読むのが主な目的ではなく、エアコンが稼働しているのが図書館（と職員室）だけだったからでした。残念ながら、熱心な読書家ではありませんでしたが、趣味のSFや推理小説以外の本に触れたのもこの時期でした。理由はよく覚えていませんが、「ハムレット」や「夏の夜の夢」など翻訳されたシェークスピアの作品をやたらと読んでいました。神話について明確に（意識的に）興味を持ち始めたのもこの頃かもしれません。社会の時間に習ったギリシアの歴史家ヘロドトスの『歴史』を読んだのも高校の図書館でした。役に立つかどうかではなく、自分の興味のアンテナに引っかかった本を面白がって読んでいた時期でした。

大学生になって、文学部日本文学科に進んだ私は、神話への興味から『古事記』を自分の研究対象に選びました。それ以降、私にとって図書館は楽しむ場所ではなくなりました。研究のための調査や発表資料を作る作業場となったのです。朝は、大学から始めた居合道の稽古を大学の居合道部道場で行い、昼は授業に出て、夕方から図書館に籠もり研究をする日々が続きました。読む本も専門書や研究資料がほとんどで、図書館で、いわゆる「趣味」としての読書をするのはほぼなくなりました。その後、大学本科を卒業して大学院生になり、高校の非常勤講師をしながら生活していた時も、図書館とのつきあいは本科の学生の時と変わっていませんでした。勤め先の高校では、まるで図書館に取り憑いた座敷童のようにべったり張り付いて文献調査などをしていたので、事務の人から大いに気味悪がられたりもしていました。

こうして今現在に至るわけです。長々と書いてきましたが、最後に申し上げる言葉としてはありきたりの文句しか出てきません。10代の頃に触れる本は自身の体験として貴重なものとなるはずですが。今はネットで本が読める時代ではありますが、図書館に来て、目についた本を読んでみる、ということも是非経験して欲しいと思います。楽しみとして図書館に来られるうちに、是非。



## 夏休み読書感想文・千頁読破記・夏休み体験文等 入賞結果発表

今年度の夏休み読書感想文・千頁読破記・夏休み体験文、及び文芸コンクールの入賞者の表彰式を、高松キャンパスでは11月12日（火）に、詫間キャンパスでは11月6日（水）に実施しました。入賞者は以下のとおりです。



高松キャンパス表彰式



詫間キャンパス表彰式

## 【高松キャンパス】

## 読書感想文

優秀賞	1年4組 (EC)	松本 愛花
優秀賞	電気情報工学科3年	浅川 万知
佳作	1年4組 (CV)	森田 優也
佳作	1年4組 (MS)	山本 拓弥
佳作	機械電子工学科3年	谷本 大航

## 千頁読破記

優秀賞	電気情報工学科2年	藤居 虹帆
佳作	1年4組 (EC)	宮崎 勝巳
佳作	機械電子工学科3年	谷本 紗菜

## 夏休み体験文

優秀賞	機械電子工学科2年	丸尾 美月
佳作	1年1組 (ME)	鈴木 侑誠
佳作	建設環境工学科3年	櫻井 洋都

## 【詫間キャンパス】

## 書評

優秀賞	情報工学科3年	山下 真輝
優秀賞	1年2組	大西 春歌

## エッセイ

最優秀賞	情報工学科3年	真鍋悠一郎
優秀賞	情報工学科3年	漆原 和輝

## 小説

最優秀賞	情報工学科2年	曾根 大靖
優秀賞	電子システム工学科3年	秋山 大翔

## 短歌

グランプリ	電子システム工学科5年	島崎 祐輔
優秀賞	電子システム工学科5年	岡部帆乃夏
優秀賞	通信ネットワーク工学科2年	久保 博貴

## 俳句

最優秀賞	1年3組	田上 諒太
優秀賞	通信ネットワーク工学科3年	横井 春樹

## 写真

最優秀賞	電子システム工学科3年	横内 裕紀
優秀賞	通信ネットワーク工学科5年	平田 雅裕
優秀賞	通信ネットワーク工学科5年	真鍋美乃里

## 講評

高松キャンパス  
学生小委員会、図書館小委員会

今年の応募総数は、読書感想文が150篇、千頁読破記が102篇、夏休み体験文が231篇の合計483篇でした。読書感想文と千頁読破記には今年も様々な本が並びました。若者の間では、スマホやタブレットの普及により本を手にする機会が減ってきているという状況の中で、本との出会いを通して新たな人生観や世界観を得た人も多そうです。また、夏休みの貴重な体験を通して、自身の新たな力や可能性、今後の目標を見つけた人も多く見受けられました。

それら多くの作品の中から今年度は、読書感想文優秀賞に1年4組松本愛花さんの「 $e^x + 1 = 0$ 」、そして、3EC浅川万知さんの「前を向いて生きる」の2作品、千頁読破記優秀賞には、2EC藤居虹帆さん、そして、夏休み体験文優秀賞には、2MS丸尾美月さんの作品が選ば

ました。

読書感想文で優秀賞を受賞した松本さんの作品は、「博士の愛した数式」を読んだ感想です。この本の中に出てくる人への思いやりやいたわりの姿。松本さんは、それらを5つの愛の形として捉えた上で、最終的に、人との繋がりの強さが、全てを包み込み、強く生きる力となっていくことを感じ取っています。また、「オイラーの公式： $e^{\pi i} + 1 = 0$ 」がそうした生き方を美しく表現していることを知り、数学の奥深さを実感した新鮮な感動が巧みに表現されています。そして、数学に取り組む姿勢を新たに、数学と真剣に向き合っていきたいという、松本さんの喜びと決意が伝わってくる優れた作品です。

同じく優秀賞を受賞した浅川さんの作品は、「つなみ」の子どもたち 作文に書かれなかった物語」を読んだ感想です。1万5千人を超える死者を出し、多くの人たちの人生を変えてしまった東日本大震災から8年。その震災を経験した7人の子どもたちが辛く苦しい状況の中でも周囲への感謝を作文に綴っていることに、浅川さんは驚くとともに、子どもたちの存在を身近に感じ、力になりたいという熱い思いが伝わってきました。また、復興の原動力となった子どもたちの「前を向く力」の大切さを感じた浅川さんが、どんな困難にも負けない強い生き

方を、自分自身の生き方にしていこうとする強い意志を感じました。

千頁読破記で優秀賞を受賞した「死」をテーマにした藤居さんの作品は、誰もが避けて通ることのできない「死」に真正面から向き合いながら、自分の生き方を見つめ直す様子が、哲学的な深さを感じさせる表現で見事に描かれています。死を前にしたときの絶望と、あたり前の日常が突然なくなる孤独と不安。藤居さんは、それらを想像しつつも、最期を迎えたときに、それまでの人生を最大限肯定できる生き方について考えはじめ、そのためには、どんな困難にも勇気をもって挑戦し続ける強い生き方が大切であるという結論に至ります。そうした藤居さんの思考過程が、最期の迎え方、そして今をどう生きるべきかについて、私たちに考える契機を与えています。

夏休み体験文で優秀賞を受賞した丸尾さんの作品は、身近な人を亡くした体験です。悲しい出来事のため題材に選んでいいのかという葛藤の中、その体験から得た自分の気持ちを正直に丁寧に綴っていました。祖母の死にまつわる出来事の描写と、丸尾さんの心情が非常に分かりやすく整った文章で上手にまとめられている点が、高く評価されました。読みやすく完成された文章は、たった5枚で終らずに、もっと丸尾さんの文章を読み続けたい、と思わせるような力を持つ作品でした。

## 読間キャンパス

### 一般教育科 国語科

図書館文芸コンクールも第4回を迎え、多数の応募作品が集まった。以下、受賞者を中心として、部門ごとにコメントを付していく。

#### ・書評部門

今回から新たに設定した部門である。個人の感想でなく、その本を評価し論じることに主眼を置いたものであるが、残念ながら応募の多数は読書感想文となっていた。個人の主観的な感想ではなく、客観的にその本を分析し、本の全体像を評価してほしい。その中で受賞者の作品は書評の形式に沿って、本の特徴をわかりやすく伝えるものであった。大西春歌さんの「沖縄の手記から」は戦争時の情景とともに、順序立てて描かれた心情描写に注目する。本の本質として女性の心の強さを読み取り、明確な指摘となっている。山下真輝君の「魍魎の匣を読んで」は作品の短所、長所の両側面から分析を加える。多面的に作品を捉えて論じている点が、評価のポイントとなった。ただし、両者とも主観的意見が前面的に表れた部分があり、今後の期待を込めて最優秀賞の選定は見送りとなった。

#### ・エッセイ部門

エッセイ部門は作品数が46と、年々応募が増えてきており、印象に残る作品も数多く見受けられるようになった。最優秀賞の真鍋悠一郎君の「私と弾幕STG」は、かつて自身がゲームへ抱いた感動と、ゲームを作る現状とのギャップへの思いを綴った作品である。二つの心情を客観的に対比・分析することによって、自身の主張を明確に伝えるエッセイを構成している。優秀賞の漆原和輝君の「守るべきもの」は日常で偶然起きた小さな出来事から思考を深めていき、命の在り方という大きなテーマ

へと話題を広げている。話題の繋げ方が自然で、一貫性のある文章に仕上がっている、いずれも構成がしっかりした作品で、根幹となる主張を際立たせるための工夫が評価に繋がった。

#### ・小説部門

9作品の応募だったが、いずれも分量が多く筆者の拘りが感じられる作品が多かった。この分野においては無意識による既存作品の模倣が入りやすい。特に自分のオリジナリティーの留意が必要であり、今回の評価にも繋がったポイントである。最優秀賞の曾根大靖君の「生命の記憶」は蚊視点で物語が進められている。異なる生物からの視点・心情を生き生きと描いており、また物語展開も読み手を飽きさせない作りとなっていた。優秀賞の秋山大翔君の「ノブナガは高校生」は、多くの個性豊かな登場人物を描き切った力作である。歴史上の人物の性質を生かしつつ、ライトノベル的な親しみやすい世界観を作り出している。両者ともに続きを思わせる結末で、更なる広がりが期待される。

#### ・短歌部門

短歌部門・俳句部門ともに「時」がテーマとして設定された。時間帯、特別なイベント、一瞬の時など様々な角度からテーマを描写する作品の応募が見られた。その中でも島崎祐輔君の作品は成人の日の出来事を中心として、これまでの人生という長い時間を背景に据えるという、二重の意味での「時」を表現することに成功している。表現するための言葉選び、込められた思い、リズム感が調和して、奥行きのある作品として仕上がっている。これらの総合的な観点からの評価によって、今回の文芸コンクールのグランプリとして選出した。優秀賞の間部帆乃夏さんの作品は十五夜が曇り空の情景を、「漆黑」という色の表現により落胆の心情を印象的に描くことができている作品である。同じく優秀賞の久保博貴君の作品は、祭りの情景を色鮮やかに詠んだ一首である。それぞれが制作事情文を読まずとも、読み手にイメージを具体的に伝えるものとなっている。

#### ・俳句部門

俳句部門に関しては、限られた字数の中でいかに時を捉えるかが問題であった。その上で季語を選ぶ必要があり、特に言葉選びが鍵となった分野であろう。応募数が多い中、言葉とリズムの工夫が受賞へと繋がっている。最優秀賞の田上諒太君は、「律の風」「扇風機」と異なる季語をあえて重ねるといったテクニックを使用した。これによって、夏の暑さがなかなかおさまらない初秋という、季節のズレを見事表現することに成功している。優秀賞の横井春樹君の作品は、海に飛び込んだ一瞬の時を表現し、その瞬間の情景が目には浮かんでくる一句として仕上がっている。

今回の受賞作品は、いずれも情景設定、言葉の選択、繋がりが方など工夫が施されており、作り手が創作行為に真摯に向き合った様が見受けられるものだった。受賞者は是非、自信に繋げてほしい。また受賞に届かなかった応募者も、今後も積極的に文芸、言葉の世界に触れることで、自分自身を表現するものを培っていくことに期待する。

最後に、今回もコピペなどネットからの文章の不正流用が幾編か発見された。学内の文芸コンクールといえど、自分の名前前で提出する文章に責任を持つようにして欲しい。不正流用は犯罪行為である。次回こそ不正流用ゼロの達成を願う。